1000年の歴史を味わえる 郷土料理 「ほうとう」



一、山梨県の郷土料理「ほうとう」

「ほうとう」は、小麦粉を練って平らに切った「ほうとうめん」と季節の野菜を入れて味噌で煮込んだ山梨県の郷土料理です。2007年に農林水産省が選定する「農山漁村の郷土料理百選」の一つにも選ばれ、多くの人に楽しまれています。

「ほうとう」は歴史が古く、奈良、平安時代に中国大陸から伝わってきた「餺飥(ほうとう)」という麺料理が起源だとされています。「餺飥（ほうとう）」は遣唐使や僧侶によって日本に伝えられた後、平安時代には、貴族の間に広がり、戦国時代には、武田信玄の最強の「陣中食」として重宝され、そして江戸時代になると郷土料理へと変身してきました。

1000年もの長い間、「餺飥」は、「はくたく」と呼ばれていましたが、時代と共に「はうたう」、さらに「ほうとう」へと発音が変化し、それに「餺飥」という難しい漢字も、次第に日常では使われなくなりました。とは言え、歴史のある名店や老舗の看板やメニューには、歴史的背景を感じさせる「餺飥」という漢字が今なお残っています。

本文は、山梨県の郷土料理「ほうとう」のルーツを辿って、そこに凝縮された歴史物語を探りたいと思います。

1) 6世紀の中国の書物に登場

「餺飥（ほうとう）」の語源や製法についての最古の記述は、6世紀に中国の北魏で編纂された農書『斉民要術』の巻八の「餅法」に見られます。

その箇所には、「餺飥は、こねた小麦粉を親指ほどの太さにして2寸ずつに切り、水に浸して薄くし、強火で煮たもの（訳）」と記されていますが、この「餺飥」と呼ばれる平たい麺料理が、現在の「ほうとう」のルーツだと考えられています。

ちなみに、『斉民要術』は中国北魏末の賈思勰（かしきょう　生没年不詳）が著した書物で、530～550年頃に成立したと推定されていて、当時の中国の農業技術や料理法や醸造技術について詳しく述べられており、現存する世界最古農法、調理法の文献とされています。

2)　平安時代に日本に伝わってきた「餺飥（ほうとう）」

平安時代の僧・円仁が留学僧として中国に渡った時の生活を記した『入唐求法巡礼行記』に、「餺飥」と呼ばれるものを各地で3回食べたという記述があります。

円仁が唐の開成4年（839年）8月15日に、現在の山東省にある赤山法華院で、「15日。……正午、寺で餺飥が用意され、役人や僧らとともに食べた」と記したのがその一例です。

平安後期に成立した『枕草子』にも「はうたうまいらせむ（ほうとうを差し上げよう）」と書かれており、この頃の他の貴族たちが書き残した日記にも「ほうとう」が登場していたため、平安貴族の好む食物として広まっていたと考えられます。

そして、室町時代に成立した古辞書『頓要集（とんようしゅう）』にも、宮廷料理として「餺飥」の記述が残されています。当時の「餺飥」は、宮廷の儀式や宴会で振る舞われる雅な食べ物として、教養ある階層の間で定着していたと考えられます。

二、「餺飥」から「ほうとう」へ

京都の宮廷料理だった「餺飥（ほうとう）」は、やがて、山梨に根付き、野菜と煮込む麺料理「ほうとう」へと独自の進化を遂げました。その理由として、地理的要因の他、戦国時代の名将である武田信玄(1521～1573)の影響が非常に大きいと考えられています。

1) 高僧からの伝承説

「甲斐の虎」の異名を持つ武田信玄は、孫子の兵法に精通し、軍旗「風林火山」や「武田騎馬軍団」を駆使して領土を拡大した人物で、戦国最強の猛将と言われています。一方、信玄は神仏への信仰心が強く、よく臨済宗の高僧たちを招いて禅学を学んでいました。

恵林寺の住職・快川紹喜（かいせん　じょうき　1502～1582）は、信玄の坐禅の師であり、軍師でもありました。快川和尚は激しい戦いに日々心血を注ぐ信玄の体を案じ、消化が良く、野菜（薬膳）を一度に摂取できる煮込み料理として、「ほうとう」の原型を勧めたと伝えられています。

2) 最強の陣中食

禅寺で食べられていた「ほうとう」に近い麺料理が、やがて信玄の陣中食として取り入れられるようになりました。消化が良く、野菜をたっぷり入れて一度に大量に作れる「ほうとう」は、厳しい戦いを勝ち抜くための理想的なエネルギー源となったのです。

そして、信玄が自らの帯刀（宝刀）で麺を切り分けたことから「ほうとう」の名が付いたという逸話も残っています。

こうして、野菜と煮込む麺料理「ほうとう」は、さらに広がり、陣中食から庶民の日常食となり、その後の明治、大正、昭和と現代に至るまで地域に深く根付いてきました。

「ほうとう」は、平安時代からの「餺飥」の面影を留めながら、山梨の気候や風土に合わせて独自の進化を遂げ、現在の姿となりました。「ほうとう」は、単なる郷土料理の枠を超えた「食の文化遺産」であると言えるでしょう。

三、「斉民要術」の最古の写本は日本に所蔵

もう一つ特筆すべき点があります。それは「餺飥」の調理法を記載し、6世紀に著された『斉民要術』の世界最古の写本が日本に所蔵されていることです。それは中国でも失われてしまった古い時代の姿を留めた極めて貴重な資料です。

『斉民要術』は、当時の人々が豊かに暮らすための実用的な知識が詳しく記載されており、北魏から唐、宋に至るまで農業の標準的な手引書として長期間にわたり重視されていました。『斉民要術』は中国だけに留まらず、日本を含む周辺国にも大きな影響を及ぼしていました。

奈良、平安時代に遣唐使や留学僧などを通じて日本に持ち込まれた『斉民要術』は、貴族や寺院で大切に書写、保存されました。その最古の写本として最も有名なのは、日本に所蔵された「高山寺本（国宝・一部）」と「金沢文庫本（1274年・鎌倉時代）」です。

京都の高山寺に伝わった「高山寺本」は、平安時代に書き写されたものとされていますが、完本ではなく、一部の巻が残っている状態で、中国（北魏）で成立した当時の姿を最も色濃く残しているとされています。

現在、東京国立博物館や静嘉堂文庫などに分割して所蔵されています。

一方、「金沢文庫本」は北宋版の面影を強く残しており、　重要文化財に指定されています。

「餺飥（ほうとう）」という郷土料理で、これだけの歴史や文化を味わうことができるのは、凄いことではないでしょうか。1000年以上も受け継がれてきたこの食文化は、現代人の宝物と言えます。その歴史に思いを馳せながら、これからも大切に受け継がれて行くことを願います。

（文・一心）

「杖莫如信」～杖から見る外交の知恵～

2019年、台湾はソロモン諸島とキリバスという二カ国との外交関係を断絶したと発表しました。ところがその後まもなく、台湾はアメリカの支援を得ることになりました。アメリカは台湾との外交関係を強固にしただけでなく、「2019年台湾同盟国際保護強化イニシアチブ法案（TAIPEI Act）」を可決し、世界各地の台湾の同盟国を支持する姿勢を示しました。

外交情勢は予測しがたいものですが、冷静に考えれば、両国が外交関係を樹立するのにどのような知恵が必要なのでしょうか。今回紹介するのは、両国の外交関係において最も重要な「誠信」に関する四字熟語「杖莫如信」です。

「杖莫如信」の「杖」は「依り所」を意味します。つまり、「最も頼りになるのは信を守ること」です。この語源は『左伝・襄公八年』（註）にあり、春秋時代中期の一つの物語からです――。

紀元前565年。晋国は若き君主・悼公の統治のもとで、六卿が権力を独占していた状況を改め、内政を整然と進めました。わずか八年の間に諸侯を九回も会合させ、晋国の覇業を再び頂点に押し上げ、南方の楚の共王と対峙する「晋楚二強対立」の局面となりました。

同年、鄭国は兵を出して蔡国を攻撃し、蔡国の公子・司馬燮を捕虜にしました。当時の鄭国の人々はみな喜びましたが、若き子産だけは同調しませんでした。子産は「小国が文徳を持たずに武功を立てるほど大きな災禍はありません。万が一、楚国が蔡国のために討伐に来たら、我々は従わざるを得ないでしょう。楚に従えば晋の軍が必ず攻めてきます。晋楚二強に挟み撃ちされれば、鄭国は少なくとも四、五年も安寧を得られないでしょう」と言いました。

この時、子産の父である公子発（子国）が怒りながら「お前は何を知っている？国の出兵という重大命令は執政の正卿様が行うものだ。子供がこんなことを言えば、首を切られるぞ」と言いました。

果たして冬になると、楚国の軍が鄭国を攻めてきました。鄭国の大夫たちは親晋派と親楚派に分かれ、ある者はまず楚と和睦し鄭の国民を守り、後で晋に事情を説明して許しを請うべきだと考えました。

当時、鄭国の執政の一人である大夫・子展は「小国が大国に仕える原則は誠信です。小国が信を守らなければ、すぐに戦禍の憂いが生じ、亡国の日も遠くないでしょう。私たちは晋国と五回の会盟を結んでいます。しかし今、晋を裏切れば、将来晋が攻めてきた時、楚が出兵したとしても、どうして防げるでしょうか。楚との友好関係は無意味です。楚の目的は鄭国を侵略することだけですよ」と言いながら、「私はかつて、頼りになるものは『信』に勝るものはない、と聞きました。ここは、厳重に守りを固めて楚軍の疲弊を待ち、晋軍の到着を待つのはどうでしょうか」と進言しました。

しかし子展の意見は、最終的に鄭国の政権を握っていた公子騑に採択されませんでした。果たして鄭国は数年の間、外交政策で晋と楚の間で揺れ動きながら、長年の戦禍に遭いました――。

時が流れても、現代世界において、誠実さは変わらず、両国外交関係の最も重要な基礎です。相互信頼の基盤があってこそ、お互いに恵みや利益を与え合い、ともに反映していくことが可能になります。この点は、2500年以上前、古代中国の人々がすでに深く体得していたのですね。

注：舍之聞之，杖莫如信，完守以老楚，杖信以待晉，不亦可乎。（舍之聞くに、杖は信に如かず、完守して以て楚を老いしめ、信を杖として以て晋を待つのみならず、亦可ならんや）

（翻訳・愼吾）

安心！快速！熱情！成功率高！
本人不用去入管 申請手續全代理 愛知 行政書士 玉田事務所
☑ 専門為中部地區中国人申請簽證　☑ 年中無休　☑ 初次電話詳談免費 中國語OK!
入管ビザ（簽證）申請専門
会社設立・投資経営
☑留学簽證轉成投資経営簽證
☑人文、技術、技能簽證轉成投資経営簽證
☑国内親屬、友人来日、投資経営
定住、永住、帰化
☑日本人配偶者簽證轉成永住、帰化
☑離婚後日本人配偶者簽證轉成定住
查証業務
☑各種簽證取得・更新・変更
☑国際結婚、家族滞在
☑日本人的配偶者
☑人文、技術、技能、投資経営など
法務業務
☑不法滞在者的在留特別許可
☑申請假釋
☑簽證被拒後，再申請
☑各種理由書作成

9:00～18:00 中国語SB 090－1729－8181
日本語SB 080－4123－8572
日本語 普通電話 0587－81－8100
FAX 0587－81－8102
〒492－8143
愛知県稲沢市駅前2-4-4　スカイル21　101
http://www.visa-aichi.com
入國管理局承認行政書士
玉田和弘